紹介：

高草木光一編『連続講義 1960年代 未来へつづく思想』

A5版 287頁：本体2500円：岩波書店：2011年2月

向井宏一郎

「連続講義 1960年代 未来へつづく思想」は、慶応大学で行われた現代社会史での講義を元に書き起こした本で、編者：高草木光一を含め、吉川勇一、原田正純、最首悟、山口幸夫の5人の講義から構成されている。本のはじめの部分は、高草木による導入というか問題提起・整理であり、60年代に起こった事柄のザックリとしたまとめと考察。小田実について論じる部分なども含め、それなりに読み応えのある導入になっている。つまり、いろいろと知らない人の名前が出てきたりして、一読しただけでは分からない部分がそこそこある。「シエースって若者の挨拶？」みたいな。（フランスの思想家です）

本の構成は、高草木の問題整理を受けて、吉川、原田、最首、山口の4人の話が続いて展開されるという形となっている。この4人は全員が1930年代生まれ。60年代を20～30代の青年として過ごした人々だ。60年代、大きく揺れ動く社会と巨大な運動のうねりのただ中に身を置いた4人それぞれの経験が、わりと淡々と話されている。吉川は、原水爆禁止運動・60年安保・ベトナム反戦・脱走兵支援運動、原田は水俣病と三池炭塵爆発事故、最首は東大闘争、山口は三里塚闘争と脱原発運動。どれひとつをとっても、当時の大事件であり、社会の構造の根幹を揺るがした出来事だ。4人の話を通して、本当に多くの人たちが自らの暮らしと存在に根付いたものとして運動に身を投じていたことがわかる。

これらを、各運動課題の要約として読むことも可能だ。4人とも、各戦線（運動課題）のはじまりから終わりまでをその渦中で過ごした人々であり、その語りは、出来事の構成や経緯の把握が正確だし、実際に体験した生々しさがある。実際のところ、左翼運動に関わっている人でも、これらの出来事（闘争）の骨子について実はあまり知らないという人は結構多いのではないだろうか。とくに、20代－30代の活動家は、ここ十数年ほどは学生運動が弱くなり消えてゆきつつあることもあって、学習会を通して知識を得ることもなかなか機会がないだろう。それに、一旦運動の現場に身を置くと、案外と本など読まなくなるものではないだろうか。また、年上の活動家とそれらの話題について話したとしても、「ふーむ、（今時のひとは）そういうことも知らないのですか、なるほどね」とか、「知らないなら知らないで、まあいいんじゃない？」というような、親切だか何だかよく分からない気遣いなどのおかげでそのまま知らないままだったりとか。もっとも、この「科学・社会・人間」の読者に、20代～30代の活動家がどのくらいおられるのかはちょっと想像つかないが。もちろん、左翼でない人は尚更知識にふれる機会も少なかろうと思う。

ただ、「60年代を代表する各戦線の要約」として考えるとあまりにもったいない、というか、各氏の話は、“要約”には収まりきれない内容にみちみちている。まず第一に、「実際に起こったこと」だけを並べてみても、その出来事の持つ素晴らしさと圧倒的な力動性には、読む人の胸をうつものがある。

吉川の話の中では、脱走兵援助運動の部分は、何度聞いても（読んでも）その劇的な展開はおもしろすぎる。こんな運動が、たった50年前にこの日本で起こっていたというのは、ほとんど信じがたいような話だ。もっとも、50年も昔の話ともいえるが。

原田の話の中では、冒頭に水俣病の発生からその原因の究明へと至る3年半にわたる出来事の流れが語られるが、それは企業（チッソ）が水俣病への自らの責任をもみ消そうとした3年半であることがはっきりわかる。この構図は三池炭塵爆発事故でも、また50年後の今日、福島第一原発事故後の放射能汚染を巡る国と企業の動きの中でも繰り返されていることだ。また、水俣病の発生から40年にもわたる関わりの中で、原田が水俣で暮らす人々の側へと歩んでいく姿が語られるのも感動的。40年間っていうのはなんといっても長い。

最首の話は、東大闘争を助手共闘の一人としてたたかった経験を基盤にしつつ、「自らの加害者性」、「自己否定」という重要なキーワードを巡って話題を紡ぐ。あいかわらず、わかるようなわからないような話が同心円を描きつづけるように展開する。（メモをとったら少しはわかるかな、と思い、ノートをとってみたのだが、あまり役には立たなかった。）「自らの加害者性」というのは、「自己否定」と微妙に重なりながらずれていく重要な概念であり、私たちは常にそこへと立ち戻りながら歩みを進めていくしかないと思っているのだが、最近はあんまり受けがよくない。重要なのは、これらの概念が実際の運動・何らかの行動と結びつく中で反芻されることだと思うのだが……。

山口の話では、高木仁三郎の横顔と三里塚闘争、そして山口自身の活動が、床屋さんのねじり看板のように交錯しながら進んでいく。特に、高木が活動家として生きていくきっかけとして三里塚の運動がこれほど大きく関わっていたこと、また、三里塚の鉄塔建設の中心に高木がいたことは、この話を読むまで知らなかった。また、山口は物理学者の出自を持ち、物理学のフィールドを足場にして活動を続けている人なので、本誌の読者の皆さんにはすんなり入る話も多いのではないか。

こうして見ると、4氏とも、その語り口の軽さに驚かされる。いい意味でもったいぶっていないし、暗さが少ない。それぞれの話を注意深く読み込めば、またあるいは多少の背景の知識をもって読めば、運動の中でかなり暗く悲惨な局面を経験していることが想像できる。そのような経験をくぐりつつ、そもそも活動を続けて来たこと自体が驚異だし、語りの中で厳しさをそれほど感じさせないのはさらに驚くべきと言えないか。

ただ、60年代の思想と経験を引き継ぐということについて考えると、その可能性と同時

に不可能性についても考えざるを得ない。4 氏の生き生きとした語りが活字の中に閉じ込められない力を持っていればいるほど、そう感じる。社会運動における思想や経験の継承は、諸々の局面を前にしての分析や判断を通してこそ行われるのだと思う。世代だけに限ったことではないが、それぞれが経験してきた運動の時代背景や社会情勢の違いによって、実際の運動課題に対する判断や視点には、当然ながら違いが生じる。例えば、現在取り組まれている運動が 2~3 年続いているとして、その運動のみに関わってきた人には持ちようのない視点があると思う。例えば、それこそ 50 年前には社会情勢の中心にあった物事で、現在は後景化しているような事柄は多い。そしてそれらが後景化していても本質的な重要性を保持している場合には、そこに立脚した視点や立場が必要とされる場面もあるだろう。もちろん、上の世代の分析や判断が、常により優れているかというとそうでもなく、大体は現場の機運や動きを読んでいない、どうしようもない判断も多いのではないか。しかし、そのようなどうしようもなさとセットで、局面ごとのひとつひとつの判断を通して、その判断を導き出す思考の方法のようなものが共有されていく。たとえその人がいなくても、「こういうとき XX さんだったらどう言うかな」というような具合に。思想や経験の継承とは、こういった形で行われてきたし、行われていくものではないかと思う。

また、もう一つは、社会運動が続いていくにあたって、遅かれ早かれ突き当たる落とし穴や壁のようなものがいくつかあるということ。引きずられがちな悪しき傾向というか。そういったマイナスの問題に向き合うとき、それを全く知らないものとして、完全な手探りで一から試行錯誤するのか、それともこれまでの蓄積（多くは負の蓄積）を踏まえて対処するのか、で必要なエネルギーは全然違ってくる。そういうときは先達の存在は本当に重要になる。

というわけで、いわゆる左翼的な社会運動が高齢化の大きな波を迎えようとしている現在、ご高齢の方にはご自愛いただきたいと思うのだ。